

福島県相馬郡飯舘村における農地の現状調査補助レポート

4月に、ふくしま再生の会の活動に帯同させていただく形で飯舘村に行き、今回、飯舘村へ行くのは、2回目となりました。このような形で、学生を原発事故による被災地に帯同させていただく取り組みは、非常に貴重な機会であり、感謝致します。

2012/10/6(土)

- ・伊達市から飯舘村に入る。
- ・明神岳を登る。
- ・ふくしま再生の会の拠点・村民の方の家に。
- ・田畑を野外観察
- ・昼食
- ・村内を見回り（・別の班は試験作付の稲刈りの手伝い）

活動の概要については、twitter を活用してネット上に公開した。

<http://togetter.com/li/386851>

以下、飯舘での活動を踏まえて感じたこと、考えたことを整理して述べたい。

<<農の営みの観点 - 事故前、被災、復興>>

村民の方の「食べるものは全部安心、自然と暮らしてきた」、「事故前まで一緒に暮らしてた七人家庭の中で、じいちゃんは自家用野菜を家族、食べさせるのが役割であり生きがい、それが全部盗られる、おかしなことになった」と言うお話や、現在、他の場所の田んぼを借りて、コメを作っていることを聞き、改めて、飯舘村には、このような自然の中で、土地に根ざして暮らす人が、いらっしゃることを実感した。

仮設住宅が、伊達市など飯舘村から比較近いこともあり、村内には除草を行った田んぼが多く見られた。田畑を荒らすまいとする農家のプライド、手入れの習慣、生きがいがあるのかなと感じた。

『環境汚染によって被害を受けるのは、当たり前のことですが、自然のなかに自然とともに生きている人たちがつねに最初に被害を受ける。これは世界中、どこへ行っても同じです。』（「水俣学講義」日本評論社 p26）と言う過去の公害の経験からもわかるように今回の事故でも、豊かな自然の中で暮らす農家や農村の人間が、経済的、精神的な面でも大きな被害を受けており、改めていたたまれない気持ちになった。（低線量被曝の健康面への影響についてはここでは議論しない。）

<<被災地、被災者への個別的な対応>>

再生の会の山、田畑、裏山などの様々なモニタリングや実証実験を見学した。

田車除染では、水田土壌の表層部を堀の中に落としこみ、埋めることで、フレコンバッグに入れずとも、除染土を処理できると言った方法を試しており、イノシシに掘り起こされていたことで、田車除染も凍土剥ぎ取りもできない水田に対しては、水遮蔽の実験を行っていた。様々な試行錯誤を経た実証実験を紹介してもらった。しかし、稲の試験作付は村内にここ以外に1箇所しかないとのことであった。

森林除染に関しても、林野庁が近くの森の伐採実験を今になってやるが、環境省や農水相も入れて、周囲の田んぼや道路への影響も考えて総合的にやってほしい、との意見があった。

詳細はわからないが、自分も環境省の森林除染の方針を決める環境回復会議に参加し、なんのための除染なのか、下流域の河川や農地への影響や、森林内の野生生物や木材への影響を考慮した総合的な調査、対応が必要ではと感じた。

また、放射線に関する情報発信を継続的に行ってきた大学教員の「放射線は特別な新しいことだから、省庁の壁を超えた政府直属のスーパーチームを作って、総合的に見てあたるべきではないか」、「意外なものが意外な形で絡むのだから、放射線を通して全体を見渡せる強力なチームがなくてはだめだと思う」と言う提言を思い出した。

村民の方の「行政のやり方だと細かいデータは取れない」と言う言葉に尽きる

ように、再生の会は、実際のフィールドに即した個別の対策を行っており、このようなきめ細やかな対応がもっと必要ではないかと感じた。

<<その他の原発事故対応の事例>>

環境省主催の「原子力被災者等との健康についてのコミュニケーションにかかる有識者懇談会」において、影浦峽委員は、ICRP Publ.111 para 16「経験によれば、『平均的個人』を使うことは、汚染地域における被ばくの管理にとって適切でないことか示されている」などを引用した上で、「コミュニケーションに参加する「原子力被災者等」は、他の誰も代わることかてきない一人一人」であり、「一般的な「科学的知見」をもって説得することと、具体的な状況を把握して対応することとの乖離」した現状を指摘している。「細かいメッシュで・体系的・継続的な測定」や、「市民による主体的な **informed decision** に必要な具体的な情報提供」が必要であり、それらが成立させている事例として南相馬の坪倉医師の活動を紹介していた。

南相馬で内部被曝検査など地域医療を行なっている坪倉正治医師らのグループでは、子を持つ母親からの「近所のスーパーマーケットで食材を買って大丈夫か？」という切実な質問に対して、スーパーで産地を選んで食材を購入している家庭、産地を選んでない家庭、地元産のものを食べている家庭でアンケートを取り、スーパーで産地を選んでも家庭と選んでない家庭の間では内部被曝の差は今のところない、と言うデータを以って、「スーパーで買うものに関しては今のところ守られているのではないのでしょうか」と伝えている、と伺った。坪倉先生自身、「現場のニーズに合う情報をできるだけ早くダイレクトに出すこと」の重要性を説かれていた。

また、首都圏のホットスポットで汚染対策活動をされている市民団体の代表の方から、「国が対応できない境界線の対応（自宅の庭の除染など）を地方行政、住民に委任できるシステム作り」が不在であり、「地方行政や住民が十分な根拠を伴う解決法を持つ場合、その実施を認める」ことや、「国では把握しきれない細部に関しては、地方行政に裁量を持たせる」ことのが必要ではないか、と言う話を聞いた。

今回、飯舘村での再生の会の活動に触れ、汚染状況や被災者の事情や考え方に合わせた、きめ細やかな対応を行なうことの重要性を強く感じた。それは理想的には、有志の個人ではなく、行政が行なうべきであり、それが現実的に困難であるならば、住民主導、現場主導のきめ細やかな調査・対応を積極的に行政が認めるような動きが必要ではないかと思った。

<<まとめ>>

今回、再生の会の活動に同行させて頂き、上記の他の活動や提言と同様の「個別的な調査、対応」の重要性を再確認させられた。「農の営み」と「被災者への個別の対応」の組み合わせさせた結果のひとつが田車除染だろうと感じた。

もちろん、あれだけの専門家集団のバックアップを被災者一人ひとりにつけることは極めて難しいが、積極的な情報発信や、行政への働きかけまで含めた活動を引き続き行なってほしいと思った。

<<何より>>

お話を伺った村民の方が、再生の会の方々と話されている時の笑顔が非常に印象的でした。再生の会の皆さまが、村民に近い目線で、1年間、村に通い続け、築いてきた信頼関係を感じました。

我々学生が家に到着すると、村民の方から「皆さんに来ていただいて非常に嬉しい、と言ってもらった。もちろん、飯舘と避難先、更に農地での三重生活を余儀なくなれており、今なお辛い思いをされていると思う。今回いただいた言葉、見たものを大事にして、今後も原発事故と向き合っていきたいです。